様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４７２３

研究課題名（和文）介入参画的アプローチによる若年教師の力量形成に関する実証的研究

研究課題名（英文）A study on the young teacher's ability formation by intervention participation approach

研究代表者
山口　孝治（YAMAGUCHI, Kohji）

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：５０４６０７０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、小学校に勤務する若年教師（採用3年目）の授業実践を対象に、彼の3年間の実践的思考様式（教授戦略）の変容を明らかにすることを主たる目的とした。毎年度、授業実践前に運動教材の構造的知識と指導プログラムへの介入（提示・説明）を行った。
　その結果、被験教師は、相互作用の戦略（コミットメント戦略）を基軸に、教具の工夫や課題解決の観点の明示等の戦略（シグナリング戦略）が効果的に発揮できるようになった。このことが情意面における児童の学習成果を高めたものと推察された。
　これより、今回提示した介入参画の方法は、若年教師の力量を高める方策として有効であるものと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、教師の実践的思考様式の高まりが教師の実践的力量形成には必要不可欠なものと捉え、その実際的発揮である教授戦略に研究の視点を置いているところに特色があり、さらに、若年教師を対象に、彼の力量形成過程を経年的変化から実証しようとしている点とその伝達可能性を見据えた方法を提示している点に学術的意義がある。
　本研究の成果は、優れた体育授業の創造に向けた教員養成や教師教育におけるプログラムの開発や「教育実践学」の発展に貢献することが期待できる。すなわち、教員の資質・能力の問われている社会的要請に応えるものであり、ここに社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：　The main purpose of the present study was to have clarified the transformation of practical thinking style(teaching strategy) of three years of a young teacher (Three years in teaching job experience) who worked for the elementary school. The presentation and the explanation of pedagogical content knowledge and teaching program had been done before the teaching practice.
　As a result, the effect teacher came to be able to demonstrate specification of the viewpoint of the device and the problem solution of the teaching tool(signaling strategy) effectively based on interaction action(commitment strategy). It was guessed that this had improved child's learning outcome on the affect side. Thus, it was thought that this method was effective as the strategy that improved young teacher's ability.

研究分野：教科教育学

キーワード：授業研究　教授戦略　体育科教育　授業分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1980 年代以降、体育授業研究では認知心理学の発展に伴い教師の実践的思考様式（佐藤ら、1990）に関する研究が多く認められるようになってきた。これまでの研究を概観すると、教師の知識領域や知識の構造－教師の意志決定－教師の熟達化－教師の反省的思考という順に研究者の関心を集めてきた（高橋ら、1996；深見ら、1997；上原ら、2003）。これにより、熟達教師の有する教授技術の卓越性や実践的思考様式の深さが、教職経験年数や授業評価を基軸に説明されてきた。

一方、こうした教師の実践的思考様式を検討するため体育分野に限ってみても、これまで面接・インタビュー法（Housner and Griffey、1985）、ジャーナル記述法（Tsangaridou and O’Sullivan、1997）、授業 V.T.R の視聴による再生刺激法（佐藤ら、1990）、「出来事」調査法（厚東ら、2004）など多面的な方法による試みが実施されてきた。しかしながら、こうした実践的思考様式は、「目に見えない教師の指導性」の発揮であるだけに、学習成果を高める教師の教授戦略を総合的に捉える研究視点と研究方法の確立が今後の課題となりつつあった。

さらに近年、「どうすれば熟達教師の有する卓越性や深さを身につけることができるのか」といった「教師を変える研究」（梅野、2006）に関心が向けられ、実践の報告が認められるようになってきた（山口ら、2012a）。とりわけ、2021 年度までに教員全体の 35.6%（約 20 万人）の退職が試算されており（2011、文部科学省）、若年教員の資質能力をどのように引き上げるかが課題とされ、「介入参画」や「組織論的アプローチ」及び「ナラティブアプローチ」といった手法が注目されていた（今津、2011）。

２．研究の目的

本研究は、小学校に勤務する若年教師（採用 3 年目）1 名を対象に、優れた体育授業実践を可能にする彼の実践的力量形成の過程を実践的思考様式の視点から分析し，その内実を実証することが主たる目的であった。

研究の段階的・具体的目的は、実践的思考様式の実際的発揮としての教授戦略を基軸に、1)被験教師（若年教師）の実践的知識と教授戦略との関係性の解明、2)被験教師（若年教師）の実態に応じた実践的知識への介入プランの構築及び蓄積、3）実践的知識の介入による被験教師（若年教師）の教授戦略の変容の検討、4) 優れた体育授業の創造を企図する教授戦略の教員養成・教師教育研究への応用であった。

３．研究の方法

(1) 計画

①被験教師の実態に応じた教授戦略の伝達可能性を企図した「介入参画」（今津、2011）の具体的な手順を決定した（介入プランの構築）。

②実践的知識への介入は、「運動の構造的（技術的）知識」を基盤に、文献による提示・解説及び指導技術のマイクロティーチングによる伝達を試みた。

(2) 方法

①被験教師には、秋期に一単元の授業実践を依頼した。このときの単元設定は任意とした。

②実践までに、実践予定教材の「運動の構造的（技術的）知識」と指導プログラムの提示・解説を行い、その前後に「展開型表現様式」（山口ら、2010）の記述を依頼した。

③指導プログラムの作成を依頼し（指導時間は任意）、単元序盤・中盤・終盤の 3 単位時間分の授業収録を行った。併せて、「出来事」調査票（厚東ら、2004）への記述を依頼した。

④児童の学習成果を測定するために「態度測定」（小林、1978）を実施した。

(3) 分析

①介入プランの適用による各被験教師の教授戦略発揮の実態を、教授戦略観察法（山口ら、2012b）により明らかにした。それらの結果を軸に、授業設計段階の実践的知識の変容と教授戦略との関係性を検討した。

②①の作業を 3 年間継続した。これにより、実践的知識の向上が被験教師の教授戦略にどのような影響を及ぼすのかを経年的変化から検証した。併せて，本研究で構築した介入プランの検証を行った。

４．研究成果

(1) 表１は、情意面からみた学習成果について、介入１年目から３年目までの３カ年における被験教師の態度得点の診断結果を示したものである。これより、男子は「普通のレベル」→「やや高いレベル」→「高いレベル」へと向上していたことが認められた。これに対して女子は「高いレベル」→「やや高いレベル」→「アンバランス」と逓減していた。

(2)（1）に関して、男子は「よろこび」の得点が介入 2 年目より、加えて「評価」と「価値」の得点が介入 3 年目に向上していた。一方、女子は「価値」の得点が介入１年目に比して、介入 2

表１　被験教師の態度得点の診断結果

介入年次	介入１年目		介入２年目		介入３年目	
学年	５年生		４年生		５年生	
性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子
判定	普通のレベル	高いレベル	やや高いレベル	やや高いレベル	高いレベル	アンバランス
よろこび	C	B	B	C	A	E
評価	C	A	C	C	B	C
価値	C	C	C	B	A	B

年目と３年目で向上していたものの、「よろこび」と「評価」の得点が何れも介入１年目に比して、介入２年目と３年目で低下していた。これらの結果が態度得点の診断結果に影響を与えたものと考えられる。

(3)　表２は、介入１年目から３年目までの３カ年における各教授戦略の発揮の割合を示したものである。これより、介入１年目では、「単一戦略」と「重複戦略」の割合が同じ（何れも 50%）であったが、介入２年目は「重複戦略」（59%）の方が「単一戦略」（41%）よりも多く、介入３年目は「単一戦略」（61%）の方が「重複戦略」（39%）よりも多いことが認められた。

(4) ３年間の平均より、最も発揮の割合が高かった戦略は「モニタリング＆コミットメント」の重複戦略（29.0%）であり、以下、「コミットメント」の単一戦略（11.0%）、「コミットメント＆シグナリング」の重複戦略（9.0%）の順であった。このように「コミットメント」戦略を基軸に単一戦略や重複戦略が積極的に発揮された背景には、この３年間の運動教材が何れも「陸上運動領域」であったため、練習活動の場面における児童の試技に対する教師のフィードバック（相互作用）が、１対１対応で積極的に展開されたことによるものと推察された。

(5) 「シグナリング」戦略については、「単一戦略」では介入２年目で逓減していたものの（9%→6%）、介入３年目で向上していた（6%→9%）。これに加えて「重複戦略」については、「シグナリング＆スクリーニング」戦略（0%→1%→3%）及び「コミットメント＆シグナリング」戦略（7%→9%→11%）ともに、漸増していたことが認められた。「シグナリング」戦略は、児童の課題の自立解決を促進される教師の様々な仕込み（教具の工夫や課題解決の観点の明示等）であり、これらの教授戦略の発揮には「運動教材の知識」が要請される（山口ら、2012a）。それ故、被験教師は学習内容（運動教材）の知識が豊かになっていたことが推察される。これには、授業

表２　介入１年目から３年目における各教授戦略の比率（%）

	戦略	介入１年目	介入２年目	介入３年目	平均
単一戦略	インセンティブ	13	5	7	8.3
	スクリーニング	4	6	2	4.0
	シグナリング	9	6	9	8.0
	コミットメント	4	6	23	11.0
	モニタリング	4	4	9	5.7
	命令・指示	8	9	11	9.3
	その他	8	5	0	4.3
	合計	50	41	61	50.7
重複戦略	スクリーニング＆インセンティブ	6	3	4	4.3
	シグナリング＆スクリーニング	0	1	3	1.3
	コミットメント＆シグナリング	7	9	11	9.0
	モニタリング＆コミットメント	32	42	13	29.0
	インセンティブ＆モニタリング	5	4	8	5.7
	合計	50	59	39	49.3

前の介入（運動の構造的（技術的）知識や指導プログラムについての提示・助言）による成果と考えられた。

(6) 被験教師は、何れの年度も「展開型表現様式」における「運動教材に対する児童のつまずきと対処法の知識」の記述が深まっていたことが看取できた。このことが「モニタリング」（児童の運動の診断・評価）戦略や「コミットメント」（相互作用）戦略の発揮に特段に影響を与えているものと考えられた。加えて、これらの知識の向上が「シグナリング」（教具の工夫や課題解決の観点の明示等）戦略を発揮させる作用を有している可能性の高いことが推察された。

(7) 上記、教授戦略の発揮の変容が、児童の学習成果（態度得点）に影響を及ぼしたものと考えられる。とりわけ、男子児童への学習成果の向上は「コミットメント」（相互作用）戦略を基軸に、「シグナリング」（教具の工夫や課題解決の観点の明示等）戦略の向上によるものと考えられる。一方、女子についてみると、介入3年目の判定が「アンバランス」であり、特に「よろこび」の得点（E）の影響が大きかったものと推察される。これには、3年目の学習内容（運動教材）の影響を強く受けたものと考える。すなわち、「投の運動」（陸上領域）の学習であり、この単元は新学習指導要領から指導可能な学習内容として提示されたものであったことから、他の運動領域のようにそれまでの指導実践事例が乏しく、被験教師にとっても指導の難しい単元であったものと思われた。このことが、男子児童にとっては教材の目新しさに惹き付けられたものの、とりわけ女子児童にとっては指導計画及び実際の指導場面におけるフィードバック等の効果が得られにくく、戸惑いがあったものと推察される。

(8) これらのことから、若年教師の授業実践に介入（運動の構造的（技術的）知識や指導プログラムについての提示・助言）することで、被験教師の教授戦略の発揮の様相が変わり、そのことが児童の学習成果に強く影響を与えることが認められた。すなわち、運動の構造的（技術的）知識や指導プログラムの知識の向上は、教授戦略の発揮を高める働きがあるものと推察された。他方、今回の事例から、教授戦略の発揮には学習内容（運動教材）の影響を強く受けていることも明らかになった。すなわち、今回の事例では3回の授業実践の何れも陸上運動領域に属する学習内容であった。こうした「閉鎖型教材」だけでなく、ボール運動のような「開放型教材」についての教授戦略の発揮の実態についても検討していく必要がある。

＜引用文献＞

① 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美（1990）教師の実践的思考様式に関する研究(1)-熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に－、東京大学教育学部紀要、30：177-198.
② 高橋健夫・歌川好夫・吉野聡・日野克博・深見英一郎・清水茂幸(1996)教師の相互作用及びその表現のしかたが子どもの形成的授業評価に及ぼす影響、スポーツ教育学研究、16(1)：13-23.
③ 深見英一郎・高橋健夫・日野克博・吉野聡（1997）体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討－特に，子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に－、体育学研究、42(3)：167-179.
④ 上原禎弘・梅野圭史（2003）小学校体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究：学習成果（技能）を中心として、体育学研究、48(1)：1-14.
⑤ Housner,L.P & Griffey,D.C.（1985）Teacher cognition：differences in planning and interactive decision making between experienced and inexperienced teachers. Research Quarterly for Exercise and Sports,56:45-53.
⑥ Tsangaridou,N. and O'Sullivan,M.（1997）The role of reflection in shaping physical education teachers educational values and practices. Journal of Teaching in physical Education,17：2-25.
⑦ 厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘・辻延浩（2004）小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究－熟練度の相違を中心として－、教育実践学集、5：99-110.
⑧ 山口孝治・梅野圭史・林修・上原禎弘（2010）小学校体育授業における教師の教授戦略に関する実践的研究－学習成果（態度得点）の高い教師を対象として－、スポーツ教育学研究、29(2)：33-55.
⑨ 今津孝次郎（2011）学校臨床社会学の「介入参画」法、教育学研究、78(4):105-114.
⑩ 梅野圭史（2006）優れた体育授業の創造を企図する体育授業学の構築に関する試論、大阪体育学研究、44：1-14.
⑪ 山口孝治・長田則子・上原禎弘（2012a）小学校体育授業における教師の実践的知識への介入が教授活動に及ぼす効果－教師の教授戦略と授業の＜出来事＞への気づきとの関係を中心に－、教育実践学論集、13：289-302.

⑫ 小林篤（1978）体育の授業研究、大修館書店：東京、pp.170-258.
⑬ 山口孝治・長田則子・梅野圭史（2012b）体育科における教授戦略観察法開発の試み(ORRTSPE観察法)、佛教大学教育学部論集、23：91-106.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 梅野圭史・藤澤薫里・山口孝治	４．巻 57
２．論文標題 ＜出来事（予兆）＞の気づきを高める体育授業研究の動向と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪体育学研究	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤澤薫里，長田則子，梅野圭史，山口孝治，上原禎弘	４．巻 55
２．論文標題 ＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきへの介入・実験的研究－小学校若手教師（５年目）への事例を通して－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 大阪体育学研究	６．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤澤薫里，長田則子，梅野圭史，山口孝治，上原禎弘	４．巻 55
２．論文標題 ＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきへの介入・実験的研究－小学校若手教師（５年目）の事例を通して－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 大阪体育学研究	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Hitoshi TAKAMI and Kohji YAMAGUCHI
２．発表標題 A Study on practical knowledge of Novice Teachers performing Music Classes
３．学会等名 Japan-U.S.Teacher Education Consortium 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kohji Yamaguchi & Hitoshi Takami
２．発表標題 Research on teacher's movement observation ability in learning outcome
３．学会等名 Japan-U.S. teacher education consortium 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hitoshi Takami & Kohji Yamaguchi
２．発表標題 A study on experienced teacher's practical knowledge in music classes
３．学会等名 Japan-U.S. teacher education consortium 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohji Yamaguchi, Hitoshi Takami
２．発表標題 Reserch on relation between teacher's movement observation ability and practical knowledge
３．学会等名 Japan-U.S. Teacher Education Consortium 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hitoshi Takami, Kohji Yamaguchi
２．発表標題 A study on teacher's practical knowledge in music classes
３．学会等名 Japan-U.S. Teacher Education Consortium 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤澤薫里、梅野圭史、山口孝治
２．発表標題 運動のつまずき（予兆）の気づきに関する授業研究－新人教師と一人前教師の比較を中心として－
３．学会等名 日本スポーツ教育学会第37回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山口孝治、高倉晃生、林修、梅野圭史
２．発表標題 体育授業の場における教師の思考活動に関する基礎的研究－小学校開脚跳び越し運動における教師の注視点と視線から－
３．学会等名 日本体育学会第67回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤澤薫里、山口孝治、上原禎弘、梅野圭史
２．発表標題 体育授業における教師の＜出来事（予兆）＞への気づきへの介入・実験的研究－小学校若手教師（５年目）の事例を通して－
３．学会等名 日本スポーツ教育学会第36回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤澤薫里、杉山友太、林修、山口孝治
２．発表標題 ＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきからみた新人教師の優秀性に関する検討：小学校教員を対象として
３．学会等名 日本スポーツ教育学会第39回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤澤薫里、梅野圭史、山口孝治
２．発表標題 運動のつまずき（予兆）の気づきに関する授業研究－新人教師と一人前教師の比較を中心として－
３．学会等名 大阪体育学会第56回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 山口孝治・石田智己編著	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 204
３．書名 初等体育科教育	

１．著者名 山口孝治・西村誠・桝岡義明	４．発行年 2018年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 179
３．書名 新　体育あそびアラカルト	

１．著者名 梅野圭史編，山口孝治他	４．発行年 2017年
２．出版社 創文企画	５．総ページ数 283
３．書名 小学校ボールゲームの授業づくり－実践理論の生成と展開－	

１．著者名 山口　孝治	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 232
３．書名 「学習成果の高い授業」に求められる戦略的思考－ゲーム理論による「優れた教師」の実践例の分析－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関